

瀬川昌久著

『中国社会の人類学——親族・
家族からの展望——』

世界思想社 2004年 252ページ

た ち ら か ず ひ こ
田 村 和 彦

I

本書は、漢民族の宗族組織を中心に漢民族と南部少数民族や漢民族内部のサブエスニックグループ関係など多面的な研究を進める人類学者、瀬川昌久氏の著作である。あとがきに記されたように、数年来の講義ノートをもとに近年の現地調査データを加えた内容となっている。ただし、こうした説明からある種の教科書的な記述を予期すると、よい意味で裏切られることとなる。ここで扱われる内容は後述のように刺激的なテーマに富んでおり、過去の調査や定説を概論するにとどまらず、今日の中国を考察するうえで非常に重要と思われる問題について視座を提供しているからである。

今日、中国に関する情報が急増するなかで、人間関係の構築に見られる方法や論理など、不可視なレベルでの生活文化について考察を行う研究は多くない。従来こうした研究の一翼を担ってきた文化人類学においては研究テーマの分散に伴い、親族研究が研究全体の主流ではなくなっている。我々の世代が人類学を学び始めた時点ですでに、出自に関する議論の多くは古典となり、連帯理論（出自による社会理解に対して婚姻縁組に依拠する関係性に重点をおいた社会理解）ですら中心的議論というには程遠い状況であった。この傾向は今日ではますます進行しているといえよう。

そのなかで、著者は家族および親族を主要テーマとする本書を公刊する意義として、改革開放政策以

降華南地域で著しい宗族の「復興」状況を例に、現代の中国社会においてこれら人的紐帯が重要性をもつ関係として認識されていることを挙げる。しかし、本書の意図するところは単に家族や親族について紹介を試みるといったレベルにとどまらない。巻頭に掲げられているように、これらを取り上げることで同時に中国の家族や親族について論じたり研究することの意義について再考すること、換言すれば中国社会研究における文化人類学の方法論的有効性と限界、課題などを明らかにすることをも射程に収めている。この点で類似の表題を掲げた書籍と一線を画すといえるだろう。評者はこの試みは概ね成功していると考えますが、その理由については最後に再び言及するものとしたい。

II

本書は、次の構成からなる。以下では各章の内容を紹介しつつ行論してゆこう。

はじめに

第1章 親族研究の歴史と中国社会

第2章 人類学にとっての中国というフィールド——欧米人・中国人・日本人のまなざし——

第3章 中国社会と親族の絆——家族・宗族——

第4章 宗族発展のサイクルと地域性

第5章 現代における宗族の復興

第6章 現代中国社会と父系出自のもつ意味

第1章では、人類学の誕生時期までさかのぼり、親族研究と研究関心の関係がエポックメイキングな理論とその提唱者の研究を中心にまとめられている。それぞれの時期に支配的であった親族研究の視座がどのような変遷を経て、初期の主要研究対象であった「未開社会」を超えて中国社会へと視線を向け始めたか解説される。一時期まで人類学における中国研究はそのほとんどが親族研究あるいは信仰に代表される観念領域の研究へと向けられる状況が続いていた。中国の出自理論形成に大きな貢献をなしたフリードマン (M. Freedman) は、親族の構造に関し

ては既存の東洋学よりも当時アフリカを中心に洗練、体系化が図られていた研究動向から主要な着想を得ていたとされる [Wolf 1985]。そこで、本書で取り上げる問題の系譜を明らかにする意味から、ここではエバンス＝プリチャード (E. E. Evans-Pritchard) やフォーテス (M. Fortes) といったアフリカ大陸をフィールドとした研究者の著作が取り上げられることとなる。親族が独自の変数として機能するのか、あるいは親族が社会構造そのものであるのか研究者間で差異が認められるものの、連帯理論による理解枠組みのシフトを迎えるまで、人類学においては出自研究をもって自らの専門領域を位置付ける傾向が支配的であった。この時点で人類学的研究の対象としては十分認識されていなかった中国社会へのアプローチは、全体的理論動向からすれば若干のタイムラグを伴う形でこの影響を受けることとなる。と同時に、この一見時間差と映る分析方法のずれは、次章で明らかとなるように中国社会へのそれぞれのまなざしと先行研究の蓄積にも左右されていると考えることができる。

第2章は、中国社会研究の変遷を取り上げ、欧米研究者、日本人研究者という国外の研究者によるアプローチと中国人による今日的な言葉を用いればネイティブによる自己文化研究とでもいうべき2つの流れを組み込む形で構成されている。黎明期には国外の研究者によりもたらされた社会観察と分析の手法が体系化され、欧米人による村落調査を経てコミュニティ・スタディーが隆盛する様子が描かれる。続いて、日本人による中国社会へのまなざしが含む問題と戦前戦中の資料を用いた研究が継続されてゆき、他方欧米を中心に、フリードマンとスキナー (G. W. Skinner) に代表されるようなコミュニティ・スタディーでは捉えられない問題をより巨視的に進める研究が新機軸を打ち立てる状況を整理、紹介している。そして、その主要な舞台となった「残された中国」としての香港と台湾で蓄積されてきたそれぞれの研究傾向に触れつつ、今日の実況すなわち親族研究への情熱が失われるなかで再び中国大陸での調査活動が可能となった過程がまとめられている。

特に興味深い記述は、全体として親族研究が退潮期を迎えるなかで、日本においては1980年代以降も同研究領域が一定の関心を占め、中国人研究者のなかでは海外に出た若手、特に日本に留学した研究者たちの手により親族研究へ深い関心が払われていたという指摘である。この傾向が、欧米の研究関心とのタイムラグによって発生したのか、あるいは別の要因、例えば固有の社会への関心、認識のあり方などと結び付いた結果として生まれたのかは考察に値する問題であると思われる。本章は日本人、欧米人研究者を主体に記述されているため、中国人研究者による研究は補足的に述べられるに過ぎず、今後の検討を要する。同様に、ある意味で外部の視点の変遷が記述の中心であるため明確に触れていないが、中華人民共和国成立以前の自社会研究と今日の社会研究における親族研究への関心の変遷についても読者として興味をそそられる部分である。第1章との関連でいえば、研究主流の移行はまったく異なる対象を選択するように働くケースと、むしろ当該分野において議論が飽和となる状況を迎えて、先行する研究を利用できる直接的な関連分野、例えば親族関係から会社における人的紐帯の様式や現地関係構築様式へとスライドしてゆくケースも考えられよう。

第1章、第2章を時間軸に沿った研究動向のまとめとすると、第3章は、家族・宗族についての説明が中心となる。まず、差異をより明確とするため日本の例と比較しつつ、父系出自についての解説が施される。家族の構成は単純な法制度や同居といった要素を見るのみでは解き尽くせず、統計資料からは読み取りにくい側面をもつ。「各家族」、「大家族」、「単独世帯」といった家族規模の分類が必ずしも通時的な意味での家族の形態を示しえるものではないことを述べ、発展と分裂というモビリティを加味して考察することで、傍系親族を含めた父方大家族が志向されている様子を明らかにしている。この家族に対する観念は、可視的な家屋の間取りを例に日本の事例と比較することからも明瞭となる。家屋の配置を用いた説明はすでに別所で試みられているが、不可視のイデオロギーを空間上の行為として表すそ

の有効性は変わるところがない〔瀬川 1995b〕。

次に、ここで見られた家族とそれを超える親族集団はどのように連続するのであろうか。著者は香港新界の民族誌を著して以降、一貫して同一の祖先から父系出自をたどる、あるいはたどると考えられている人々の集団およびカテゴリーに対して「宗族」の概念を用いてきた。調査地で頻出するエミックな概念ではなく、また英語文献では“lineage”と表記されることが多い集団を取って宗族として分析の対象とする意図については、繰り返し触れられており、ここで取り上げる必要はないだろう（118～119ページ）〔瀬川 1991, 22-24; 未成ほか1988, 190-191〕。重要なことは、漢民族の人類学的研究に大きな足跡を残したフリードマンにより「それ自体、用いられる集団や擬似集団の正確な性質を明白に指すものではない」〔フリードマン 1995, 33〕として採用されなかったこの概念を使用することにより、明確な系譜関係を記録するものから系譜関係を曖昧さを残すものまで幅広く分析に取り込むことが可能となり、中国各地で見られる様々な事例を考察可能とする点にあるといえよう。

本章の記述する出自集団と家族の関係性の問題は、研究上多くの議論が交わされてきた複雑な経緯をもつが、宗族概念とそれを介して紹介される事例によって説得力をもって論じられている。

第4章は「宗族発展のサイクルと地域性」という全体のなかでもっとも歴史的深度の深い主題を扱っている。人類学の世界において歴史学との生産的な関係構築に向けた提案がなされることは目新しい現象ではなくなっている。とりわけ、中国研究の分野においては文字資料を無視しえず、資料の利用をめぐって様々な議論が交わされてきた。繰り返し同様の主張が提起されつつも、実際の研究において相互に議論可能な場を形成しえた例は多くはない。著者は早い段階から、族譜を手がかりとし記述された情報が必ずしも正確な出来事の生起を反映しているものではないと限定を加えつつ、移住伝承と付き合わせる作業を通じて定住化の過程を再構成する社会史的研究を積み上げ、観念のレベルでは漢民族に共有される歴史意識のリアリティへと迫る研究を行って

きた〔瀬川 1996〕。その意味で、文字資料とフィールドワークで得られた資料の相互活用性について意欲的に取り組んできた研究者による試みのひとつと捉えることができるであろう。なお、その成果のひとつである『族譜——華南漢族の宗族・風水・移住——』は中国語に翻訳され、高い評価を受けていることを付記したい。

本章の主眼は次の問題意識にある。近年、歴史学的研究の進展により、従来中国南部でとりわけ発達している宗族という形態は超時代的で伝統中国のなかで反復発生するものとしてではなく、歴史過程のなかで発生した比較的新しい親族形態であることが明らかにされつつある。この成果を踏まえつつ、宗族という形態の発生が歴史的空間的全体構造のなかで何らかの規則的なパターンとして認識できるのかという問いからはじめ、形成条件、現在観察可能な宗族らしきものとの異同へと問題を発展させてゆく。著者も認めるように中国全土を収めるような理論体系は多くはないが、ここではスキナーのマクロリージョンモデルを使用しつつ、珠江デルタと隣接する地域を事例に論を進めている。人口移動と地域的偏差を9つのマクロリージョン仮説を用いて説明する手法は瀬川（1995a）にも見られるが、本章ではより詳細に嶺南および東南沿海マクロリージョンの人口移動の様子を描いている。陝西省、ここでの区分でいえば中国北西部を研究する評者にとって、この仮説が嶺南および東南沿海地域を除いて詳細に検討されてこなかったこと、また、スキナーの示した時間的地域的区分がどの程度妥当なものであるかなど議論の余地は少なくないが、これら一連の問いは研究者がそれぞれのフィールドから修正あるいは反論を行う必要がある性質のものだろう。少なくとも、スキナーの仮説への総体的な懐疑がそのまま本章へ適用されるべきではなく、むしろ作業仮説に従う限り非常に整合的にここで取り上げられた事例を説明している。いずれにせよ、本章での分析は、研究の蓄積された地域から発信された他地域への課題として受け止めるべきであろう。

第5章は最新の調査資料が豊富に盛り込まれた構成となっている。中華人民共和国成立以降の中国に

において宗族が解体あるいは機能停止に追い込まれたことはよく知られている。このことが現地の調査不可能性と並んで研究者をして香港や台湾へと向かわせた大きな理由のひとつであることはすでに第2章で見たとおりである。しかし現在の中国では、従来の宗族そのものではないにせよ、東部沿海部、南部を中心に宗祠の建設や族譜の新たな編纂、人々の組織化といったかつての宗族を彷彿とさせる活動が活発化している。本章では多くの資料が参照されてきた広東省にとどまらず、閩南地域、安徽省、海南省の事例にも言及されており、宗族「復興」の活動が広大な地域に見られる現象であることを印象付けられる。

ここで改めて確認しておきたいことは、広範な宗族の展開を支えていた要素のひとつは族産と呼ばれる共有財産にあったことである。例えば陳翰笙によれば1930年代には当時広東省全体の耕作地のうち3～4割を族田としている。この見解に従えば、土地改革により共有地を解体された宗族にあって共有財産を失ったままその団体的な活動を再開させる利点はどのようなものであろうか。再び結合する機会を探っている現在の宗族が以前の宗族のもつ集団的な防衛力や族産を期待するものでない以上、何を求めて求心力としているのだろうか。

その原因として著者は大きく分けて次の2点を指摘している。まず、現在観察できる上記地域の宗族「復興」では、海外資金の呼び込みが重要な役割を果たしてきた。歴史的要因により香港を経由した資金であったり、台湾へ渡航した親族を介してもたらされたものであったりと資金の来源は一様でないが、経済的動機が少なからず「復興」を促進していた点に注目してよい。その後、国内の経済活動が活発化するなかで、1990年代後半からは地元の有力者による宗族「復興」の動きも現れている。宗族の強固な伝統をもたない地域では目下のところ「復興」の動きも見られず、このことから宗族が再び意味を帯び始める現象は単なる過去の再現ではなく、すでに確立されていた社会的威信に関する表象回路を用いつつ、新たな社会関係を形成してゆく営為として捉えることが可能となる。その回路とは、父系出自理念

に基づく関係である。

次に、人々の歴史意識が重要な意味をもつことが指摘される。すなわち、土地改革、人民公社、文化大革命といった激動の30年間を挟んで、自らを過去と繋ぐ歴史を再構築する際に宗族というシステムが大きな役割を果たしていることに原因のひとつが求められる。中華人民共和国成立以前の著名な学者と同列に人民解放軍の功労者や国民党の政治家もまた取り込まれる状況に奇妙な感覚を覚えるとすれば、それは我々観察者の歴史認識によるものであり、著者のいうようにここでは祖先の顕彰を通じて歴史の連続性を基調に認識されていると捉えるほうが適切であろう。

本章で取り上げられたいくつかの事例が宗族の「復興」に関する一般例とすると、広東省南州市珠璣巷の宗祠復興運動は特殊な事例といえるかも知れない。運動に参加する姓の多さもさることながら、表象される人物が中国全土に結び付けられるそのスケールにおいても別格な存在と考えられる。しかし、参加者の次元から考察を加えることで、今日の宗族復興運動の一側面を的確に表す格好の思考の材料を提供しており、ここでの分析はとりわけ刺激的である。

III

以上、本書の構成に沿う形で行論してきたわけだが、最後に本書の占める研究上の位置について述べなければならない。扱われるテーマが人類学全体における親族研究の変遷から、フィールドの社会史ともいべき宗族の発展過程、観察可能な近年の宗族「復興」に至り、その分析手法も多角的であることから総体としての評価は評者の力量を超えるが、数点に絞って評者なりの位置付けを試みたい。

人類学的知的背景から中国研究を進める者にとって、とりわけ家族や親族に関心を寄せる研究者にとっては、フリードマン以降いくつかの課題が残されてきたといえる。そのうちのひとつは、宗族の形成理由であり、どのような条件のもとで大規模な発達を遂げたのかという問題である。この難題に著者

は正面から取り組み、マクロリージョン仮説を巧みに取り込むことで説明を行っている。フリードマン、スキナーに共通する研究方法としてすぐに想起されるのは、人類学者でありながら中国社会を考察するにあたって、安定し自律的で完結したコミュニティ像を超越し全体社会の分析可能な枠組みの構築を目指した点であり、学際的な手段を積極的に取り込んだことであろう。その意味で、著者の問題設定もまたこれら先学の系譜の上であり、さらなる発展を試みるものといえることができる。もちろん、このように位置付けたからといってコミュニティ・スタディーの必要性を否定するわけではない。むしろ逆に、緻密な個別社会の研究経過があるからこそ本書のように説得的な議論を展開することができたと考えるべきであろう。中国での調査が条件付きながら不可能ではなくなり、各地からの事例報告が増加する今日、次に期待される研究の展開を見定めるうえで、本書の示した意義は大きい。

次いで、中国の家族、親族へ向けられてきた研究者の視線を踏まえ、他方で旧来の宗族との異同に留意しつつ改めて今日の宗族「復興」の動きを分析するプロセスが評価されよう。そこで得られた結論、経済的富を社会的な威信へと変換し人間関係を構成する動力、歴史の再編成を通じて行われる自己と社会の連続性を求める動力をもって現在の中国研究における親族、家族研究の重要性を説くことで、親族を主要テーマとする研究者ならずとも広く賛同を得るところではなかろうか。ここから、親族研究が低調となっている人類学に向けて新たな地平を開拓する可能性に期待がもたれる。

以上の点から、著者が冒頭で掲げた目的は達成されているといえるだろう。各章にちりばめられている微視的なデータ分析に立脚する中国社会への考察は、本書の禁欲的なサブタイトルを超えた広がりを持ち、社会のもつ運動メカニズムとでもいうべき方向性を考えるうえで非常に示唆に富んでいる。本書

が人類学者のみによって消費されるだけではなく、広く中国を研究対象とする人々に読まれることを期待する。

文献リスト

<日本語文献>

- 末成道男ほか 1988. 「共同討論——漢族研究をめぐる諸問題——」末成道男編『文化人類学5 漢族研究の最前線——台湾・香港——』アカデミア出版会。
- 瀬川昌久 1991. 『中国人の村落と宗族——香港新界農村の社会人類学的研究——』弘文堂。
- 1995a. 「巨大社会の脈動——人の移動と地域開発——」曾士才・西澤治彦・瀬川昌久編『暮らしがわかるアジア読本 中国』河出書房新社。
- 1995b. 「中国人の居住空間——住居——」曾士才・西澤治彦・瀬川昌久編『暮らしがわかるアジア読本 中国』河出書房新社。
- 1996. 『族譜——華南漢族の宗族・風水・移住——』風響社。
- フリードマン、モーリス 1995. 『中国の宗族と社会』（田村克巳・瀬川昌久訳）弘文堂（原書1966年）。

<英語文献>

- Freedman, Maurice 1979. *The Study of Chinese Society: Essays by Maurice Freedman* (selected and introduction by G. William Skinner) Stanford: Stanford University Press.
- Wolf, Arthur 1985. "The Study of Chinese Society on Taiwan." In *The Chinese Family and Its Ritual Behavior*. eds. Hsieh Jih-chang and Chuang Ying-chang. Taipei: Institute of Ethnology Academia Sinica.

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)